

よい文章を書くためには、技術を磨くだけでは不十分。さまざまな体験そのものが文章表現の大事な「根っこ」となります。今回は、名著をのこした先人を例にあげ、その大切さについて、まとめていただきました。

「文章修業では根っこが大事」

カシの幼木はまず垂直に根を伸ばす。その間、幹の成長は遅い。しかしひとたび根が地中深くに伸びて安定してくると、あとは成長がはやい。根っこがしっかりとついたら、幹や枝葉は荒々しい風雨に負けずに育つ。

◎

このごろしきりに思うのは「文章修業では『根っこ』が大事だ」という極めて平凡なことがおろそかにされていることだ。

夏目漱石は漢学の素養があった。俳句の修業もし、禅の修行もした。建築家になろうとしたこともある。加えて、英文学を学び、ついにイギリス留学の機会を与えられ、ロンドンでは数知れぬ英文学の名作を読破する日々を送った。そういう体験がみな、漱石の文学の根っこになっている。

さらに忘れてならないのは、落語だ。漱石の寄席通いは有名だが、その作品に「なめらかさ」や「諧謔味」を与えたのは、落語の影響だったと私は思っている。

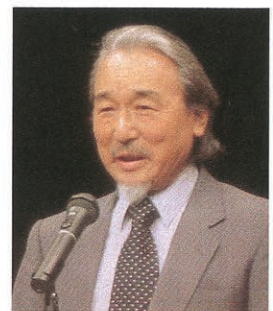
必要なのは、落語の「知識」ではない。落語を楽しむ、からだじゅうで落語を味わったことが、『坊っちゃん』『吾輩は猫である』『二百十日』の笑いを生んだ。多様なモノ・コトへの関心こそ根っこを強いものにする。

◎

女優の沢村貞子さんは、人の世の酸いも甘いも噛みわけた長屋のおぼちゃん、という役どころで知られた名わき役で、しかも、すぐれたエッセイストだった。

その沢村さんが小学二年のころ、いい成績をもらった。家に帰り、母親に通信簿を見せられて自慢した。母は「あ、そうかい」といったが、それだけだった。不満だった。つい「できない子だっておおぜいいるのよ。左官屋さんの初ちゃんなんか算術（いまの算数）ができてなくて」といいだすと、母はさとした。

「人間、学校の勉強さえできればいいっていうわけじゃないよ、初ちゃんは、算術はへたかもしれないけど、弟たちの面倒をよく見



●たつの・かずお
朝日新聞社入社。ニューヨーク支局長、東京本社社会部次長、編集委員を経て、論説委員。「天声人語」を13年間にわたり執筆。平成6年朝日カルチャーセンター社長を経て、現在著述業。

るし、ご飯の仕度だつてよくできる。人それぞれ、みんないいところがあるんだからね」

文章の根っこになるのは知的な体験だけではない。算数の成績がよい子よりも、幼い弟妹の面倒をよく見る子のほうがずっといい文章を書く場合があるだろう。よく親の手伝いをするのが、どれほどその子の人間的な成長に役立ち、ひいては文章を書くときの根っこになることか。

「自分の自慢をするよりも人の『いいところ』をきちんと見る人になる。自分中心ではなくて相手の身になる」

沢村さんの母は、そう娘をしつけたかったのだろう。母は、知能指数の高さよりも、心の指数（思いやり指数、とでもいおうか）を大事にする人だった。

下町の女の心意気、暮らしの知恵、粋を大切にする美意識、何よりも人を思いやる心、それが沢村さんの、『私の浅草』を始めとするたくさんの随筆集の「根っこ」だった。